戦争に協力しない！させない！

練馬アクション

Web 版第４号　2025 年８月１日号

米軍がイラン攻撃で使った地下貫通型爆弾「バンカーバスター」の模型

【巻頭言】参政党躍進の“戦後 80 年”と石破の歴史見解

2023 年２月 21 日に、「ヘイトスピーチを許さない！練馬」主催で「要警戒！統一地方選をめぐるヘイト集団の動き　２・21 学習討論会」を開催し、三木譲（差別・排外主義に反対する連絡会）さんに参政党に対する警鐘を鳴らす話をしてもらった。残念なことに先見の明があったというか、それから２年後の都議選で練馬から参政党議員が選出され、参院選では参政党が躍進することとなった。「極右勢力が「コアな支持者の枠を超えて広がる」現象」（佐原哲哉『極右インターナショナリズムの時代』、有志舎、2025 年７月。次号で詳しく書評）が、欧米だけでなく日本でも本格化したと言えよう。

一過性のポピュリズム現象と見る向きもあるが、練馬選出の都議は数年前から平和台、氷川台で朝立ちし、昨年の衆院選で春日町にも進出するなど、地道な活動をしてきた。練馬区議のＸへの投稿を調べると「参政党地方議員と共に靖國に参拝。英霊に感謝」などと出てくるが、都議の場合、「子育て世代に手厚い政策を」とか「子どもの安全」や「オーガニック」を前面に出していた。その効果なのか、駅前情宣などを見ると「ママ友」らしき人たちが支援していた。それが、子育ては「外国人留学生が優遇されている」といったように、「オーガニック」は「輸入農作物・食品は危険」を媒介に、「日本人ファースト」なる差別・排外主義に結びつく。

目的のためには様々な意匠を凝らすのが極右の常套手段だ。例えば、フランスの極右思想家・カミュは「エコロジスト」と称している。彼の先駆けと言われるドブノワは、「文化相対主義、植民地解放、反グローバリズムなどの左翼の思想を躊躇なく取り入れてきた」と言う。しかし、彼が目指すところは「文化的に定義された民族国家としてのフランスの政治的経済的自立」。彼が「重視する生得的な文化共同体を維持するためには、国家は必要不可欠」。「マルクス主義の用語も部分的に取り込」むが、「左翼が構造的収奪と低開発からの解放を求めるのに対して、ドブノワの目的は移民の抑制」。戦略論に関してはグラムシのヘゲモニー論を借用。「アナーキズム的発想」に見える「相互扶助」も主張。極右は新自由主義的規範を内面化しているとも言う（前掲書参照）。だとすれば、「相互扶助」は陣地戦の手段ということになる。

参政党の目指すところと手法は、以上のフランスなどの極右のそれを、ネットを通して知り、参照しているのでなかろうか。日本的に言えば、「生得的文化的共同体」は軽薄短小な天皇主義、「相互扶助」は「公助削減」を補う「課題解決型NPO」などによる「共助」というところか。

参政党地方議員の経歴を調べていくと、キャリアの上で何らかの挫折経験があり、それを資格取得などで乗り越えて個人事業主として社会的地位を築いたといった経歴の者が少なくない。女性の場合には、プラス「子育ても頑張っている」。挫折体験で背負った承認欲求（アイデンティティ探し）が天皇主義、「子育て」とも結びついた道徳教育強化・教育勅語賛美につながる。自力で社会的地位を築いたという自負は、新自由主義、「文化共同体」や築いた社会的地位を守ってくれ、矛盾や反発を押して規制緩和を強力に推し進める「強い国家」に連なる。それは、起業支援などの「課題解決型 NPO」の助力を得ても社会的地位を築けない者は“頑張れない弱者”だと切り捨てるという発想とセット。その発想を、苦境にある者も含め「氷河期世代」以下の世代の多くが内面化している。そして彼らの承認欲求も国家、そして「文化共同体」へ誘導されやすい。といっても、SNS で繋がっている気分。敵を作って「～でない」という結集。敵は、大きな政府、共産主義、反日・・・。

もう一皮剥けて議席を伸ばすために、“極端な右翼”というイメージを払拭しようとするかもしれない。「日本人ファースト」も、資本に必要な「高度人材」と搾取できる外国人は受け入れるという面を強調する形にデフォルメするかもしれない。それこそ、巧妙な差別・排外主義であり、既に政府が進めている入管政策なのだが・・・。

こう見ていくと、参政党と伝統保守はそう違いがない。高市などとの共振性が高い。といって合流はないだろう。様々な極右が存在感を示すために差異化を競いつつ、政治全体を右に右に引きずっていく。イスラエルでは極右のネタニアフをもっと極右が引きずっていっている。そんな「イスラエル化」を止めなくてはならない。

「石破やめるな官邸前行動」に集まった人のインタビューを観ていたら、「ひめゆりの塔に供花するようなことを出来るのは内閣総理大臣だけですから、戦没者追悼式などのある８月という大事な時期にやめるべきではない」と言っている人がいた。

その石破は、孫・子の代に「謝罪の宿命」を負わせないと言い、「積極的平和主義」を標榜した安倍の“戦後 70 年談話”を変更しないとし、“戦後 80 年”に際して談話は出さず、「見解」を出すと言っている。そして「見解」では自衛隊制服組が国会答弁をできるようにすることや、自衛官を裁く特別裁判所（軍法会議の卵）の必要について触れるとも報じられている。

関税交渉という名の「経済安保交渉」が一段落する目途がついたようだ。その分析も踏まえ、“極右政党が一定の存在感を示す政局”を注視し、石破であろうとなかろうと進めるであろう“日米安保を新たな高みに引き上げる”動きと対峙していかなければならない。

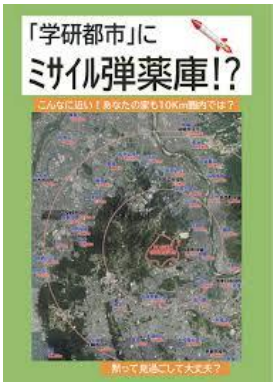
（文責：池田）

【活動日誌】

7月3日 どうすれば回避できるの？ ヘイトが付け入るネタになりかねない ゴミ出しトラブル
東京清掃労働組合練馬支部組合員による「外国人向けゴミ出しガイダンス」
知人に伝えたい人、近隣でのトラブルに苦慮している人 大歓迎！
協力:難民・移民フェスねりま Keepers
7月4日 辺野古新基地反対防衛省行動
7月11日 ガザ虐殺戦争、イラン戦争・・・イスラエルをトランプは野放しにするな！ アメリカのイラン攻撃糾弾！
やめろ！イラン戦争 日本政府の戦争加担を許さないぞ！7・11行動
呼びかけ トランプ来日・石破＆天皇会談に反対する実行委員会
7月14日 戦争に協力しない！させない！練馬アクション第二月曜学習会
戦後80年 天皇、沖縄・広島・長崎"慰霊の旅"を問う7・14学習会 問題提起 中川信明さん（練馬教育問題交流会）
7月20日 第15回「日の丸・君が代」問題等全国学習・交流集会
7月21日 飲み食いしながら参院選結果を踏まえてこれからの運動を考える7・21政談会
呼びかけ 戦争に協力しない！させない！練馬アクション
7月31日 5月10日から早2ヵ月・・・ お待たせしました！ 難民・移民フェス主催者と練馬の仲間の反省会
呼びかけ 難民・移民フェスねりま Keepers

【集会案内】

■大軍拡と基地強化に NO!アクション2025 発足集会



学研都市にミサイル弾薬庫！ 黙って見過ごしてよいの？

お話 呉羽真弓さん

「京都・祝園ミサイル弾薬庫問題を考える住民ネットワーク」共同代表
「戦争を止めよう！沖縄・西日本ネットワーク」共同代表。

日時 8月2日（土） 13:15開場 13:30開始

会場 文京シビックセンター・5階・会議室 C※資料代 500円

■入隊したらさぁ大変！自衛隊 練馬パネル展

8月12日(火)・13日(水) 会場 ココネリ3階ホール 入場無料

★パネル解説 案内人:大内要三さん 両日とも15時から
★オンライン講演会 12日19時から 元自衛隊員セクハラ被害者の証言
お話:魚住真由美さん
★資料映像上映＆解説 13日19時から

■トランプの創る世界に NO!を8・17集会

日時 8月17日(日)13:15開場 13:30開場 会場 文京シビック4階ホール 資料代 500円

【問題提起】
・西欧から見たトランプが創る世界 鵜飼哲さん(一橋大学名誉教授／フランス現代思想)
・中東とトランプ時代のアメリカ 佐原哲哉さん(明治大学政経学部教授／東欧史・中東史)
・ジェンダー・セクシュアリティの権利に関するトランプ政権の攻撃と日本への示唆
本山央子さん(アジア女性資料センター、お茶の水女子大学／フェミニスト国際関係論)
主催 トランプ来日・石破＆天皇会談に反対する実行委員会

■“戦後 80 年”目の 8・15 を踏まえ、9・1を前にして

学び舎の中学社会・歴史的分野の教科書『ともに学ぶ人間の歴史』を通して歴史像の今を考える 8・25 学習会 ※資料代:500 円

日時:8 月 25 日(月)20:00 より(終了予定 21:30) 会場:ココネリ3階・多目的室2
呼びかけ ヘイトスピーチ許さない・練馬／練馬教育問題交流会 連絡先 090－5208－5803(池田)

■米軍・自衛隊参加の東京都総合防災訓練2025に反対する8・30集会

勝手に煽るな！防災に名を借りた戦争訓練─防災・「避難」・治安出動

日時 8 月 30 日(土)13:45開場 14:00開始（予定）
会場 練馬区役所 20 階・交流会場 ※資料代 500 円
主催 米軍・自衛隊参加の東京都総合防災訓練に反対する実行委員会
協力 戦争に協力しない！させない！練馬アクション あるこう会(板橋)
連絡先:090－5208－5803(池田) 090-3509-5441(あるこう会(板橋))

■2025/08/30 映画「津島-福島は語る・第二章-」練馬上映会

映画「津島-福島は語る・第二章-」練馬上映会
日時 8 月 30 日(土)18 時 20 分～21 時 30 分(開場 18 時 15 分)
会場 練馬区立区民・産業プラザ(ココネリ)ホール西側 参加費 1,000 円(事前予約 900 円)
主催 核・原発のない未来を子どもたちに@練馬
※ご予約お問い合わせ nonukes.nerima@gmail.com

■戦争に協力しない！させない！練馬アクション第二月曜学習会

“戦後 80 年”天皇・長崎「慰霊の旅」を前にして **原爆の日を振り返る9・8学習会**

報告:広島、長崎を8・6、8・9に訪ねた練馬の仲間他

日時:9 月 8 日(月) 19:00 開場:サポート練馬 連絡先:090－5208－5803(池田)

■大軍拡と基地強化に NO！ 軍 事費 GDP 比3・5%～5%への引き上げを許すな！ 9・13概算要求分析会

日時 9月 13 日(土) 13:15 開場 13:30 開始 予定終了時間 16:30
会場 文京シビックセンター4F ホール ※資料代 500 円
【主催】 大軍拡と基地強化にNO！アクション 2025

■初めて「琉球人は先住民族」と認めた大阪高裁判決から 2 年

琉球人遺骨の返還を求める 練馬の集会

日時 9月 26 日(金) 18:20 開場 18:30 開始
会場 練馬区役所本庁舎 20 階交流会場

お話 與儀 睦 美（ヨギムツミ）さん（琉球人遺骨返還を求める会／関東 事務局長）※資料代 500 円

呼びかけ 戦争に協力しない！させない！練馬アクション連絡先 090－5208－5803(池田)

【学習会報告】天皇皇后沖縄・広島 戦後 80 年「慰霊の旅」の欺瞞性

中川信明（靖国・天皇制問題情報センター事務局）

※7 月 14 日の学習会で報告いただいた内容を論文化していただきました

1. はじめに

天皇・皇后は、6 月 4 日、5 日に娘・愛子を伴い沖縄を訪問し、6 月 19 日、20 日に広島を訪問した。また、7 月 6 日～13 日にはモンゴルにも訪問し、9 月には国民文化祭にあわせて、長崎も訪問するとのことである。これらは、戦後 80 年の「慰霊の旅」として行われている。

2. 沖縄・広島訪問（「慰霊の旅」）の概要

沖縄訪問は以下のとおり。6 月 4 日は、摩文仁の丘の国立沖縄戦没者墓苑、平和の礎で祈りをささげ、沖縄平和祈念資料館を見学、6 月 5 日は、小桜の塔で祈りをささげ、対馬丸記念館を見学し、さらに国営沖縄記念公園首里城地区を巡り、帰路につく。

広島訪問は以下のとおり。6 月 19 日は、平和記念公園原爆慰霊碑で祈りをささげ、原爆資料館、被爆遺構展示館を見学、6 月 20 日は、広島市安佐南区（14 年豪雨災害）で祈りをささげ、広島市豪雨災害伝承館を見学し、さらに、原爆養護ホーム「矢野おりづる園」を慰問し、帰路につく。

3. 沖縄・広島「慰霊の旅」の欺瞞性

① 昭和天皇の戦争・戦後責任を不問にする

昭和天皇には「開戦」を含めた戦争総体の遂行の責任があることは言うまでもないが、こと、沖縄戦や広島・長崎の原爆投下については、「終戦」を遅らせた責任＝「遅すぎた聖断」がある。すなわち、1945 年 2 月に近衛文麿が早期終戦の上奏文を出したのに対し、昭和天皇はそれを拒み、戦争を続けたために、その結果、沖縄戦、広島・長崎原爆投下がおこった。

さらに、昭和天皇は、戦後（1947 年）、米軍の沖縄統治に関する「天皇メッセージ」を発し、その結果、25 年にわたる米軍統治が続いた。以上をふまえて、昭和天皇は戦後、沖縄に足を踏み入れることはできなかった。

また、昭和天皇は、1975 年 10 月の記者会見において、「1945 年 8 月の原爆投下は遺憾なことであり、広島市民にとってはお気の毒なことであったが、戦争中の事であり致し方ないことであると思っている。」と発言した。

そして、子である平成天皇（現・上皇）も、孫である現・天皇は、これらの昭和天皇の言動について謝罪することも言及することもないし、現在はほとんどのマスコミもスルーしている（沖縄タイムスや琉球新報を除いて）。今回も、天皇は沖縄訪問に際し、「お気持ち」を発表しているが、「沖縄の人々の苦難の歴史に思いを寄せ、戦争の悲惨さや平和の大切に思いをあらたにした」と語っているが、全く他人事であり、謝罪の気持ちは微塵も感じられない。

② 現在の問題については頬被りし、隠蔽する

天皇は、「沖縄戦」については「不幸なこと」として言及するが、米軍基地問題については「政治的」であることを理由に言及しない。それは、平成天皇の時代から変わらない。

「慰霊の旅」が始まったのが、戦後 50 年（1995 年）の東京・広島・長崎であるが、むしろ、それ以降「戦後補償」に対する政府の姿勢にブレーキがかかっている。また。「慰霊の旅」が（その他の「行幸啓」も）、ガス抜きの役割を果たす。たとえば、今回、天皇・皇后が被団協の方に会って「おことば」をかけることが、核兵器禁止条約批准運動にブレーキをかけることになるのではないか、と危惧している。

6 月 5 日付の東京新聞の記事には、「（天皇一家に）全世界が平和であることの力添えをお願いしたい」とか「（天皇夫妻や愛子には）責任や歴史を引き受けていく姿勢があるのではないか」との沖縄の市民の声を紹介されているが、このような幻想をふりまかれることによって、平和運動は骨抜きにされていく。

3. 繰り返される天皇皇后行幸啓における住民動員

今回、広島平和公園における「天皇皇后奉送迎」の広島市教委による小中学生動員が問題になり、反対の声が多く出された結果、宮内庁への児童・生徒の名簿提出は断念したが、動員自体は行われた。

小中学生の「奉送迎」への動員は、「慰霊の旅」だけではなく、行幸啓において繰り返されている（さすがに沖縄では行われなかった）。子どもたちを、天皇制へと包摂している装置に歯止めをかけなければならない。

また、今回、沖縄でも広島でも、天皇皇后の宿泊したホテル前に、「奉送迎」の提灯行列が繰り出された。日本会議や神社本庁による仕掛けである。しかしながら、それが天皇行幸啓に伴う「風物詩」のようにマスコミに取り上げられることは看過できない。「天皇皇后を歓迎することはあたりまえ」との同調圧力を拒否する。

4. 天皇皇后「慰霊の旅」を批判続けることの大切さ

天皇皇后の「慰霊の旅」は、昭和天皇の戦争責任＝天皇制の責任を不問にふし、隠蔽し、ひいては、日本（人）の戦争責任をあいまいにし、忘却することにつながる。したがって、「慰霊の旅」を批判し、その欺瞞性を明らかにすることは、私たち自身の戦争責任の継承と実践の作業である。

また、それは、現在の反戦平和運動の中核を形成するものであり、その点をあいまいにすることは運動に弱体化をもたらすものであるから、だからこそ。私たちは「慰霊の旅」を批判し続けなければならない。

【特別寄稿】「戦後80年」を考える…沖縄戦の記憶をいかに継承するか

今年2025年は「戦後80年」ということで、さまざまに取り組まれたり論考が発信されたりしている。一方で、日本国内のみならず世界に目を向けると、「戦争体験」が生かされているとは到底思えない、軍事優先の戦争政策が各地で横行している。広島の原爆死没者慰霊碑には「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませぬから」と刻まれているが、戦争や虐殺はなくならず、それればかりかその準備に邁進している人が多いのが現実である。

以下、広島への原爆投下同様「ありったけの地獄を一つにまとめた戦争」といわれる沖縄戦の記憶を継承する作業に触れながら、考えてゆきたい。「軍隊は住民を守らない」とする沖縄戦の体験から、私たちは何をいかに学ぶことができるか。

■沖縄戦への歴史修正主義

今年５月３日、那覇市内で開かれた憲法講演会にて、自民党の西田昌司参院議員が「ひめゆりの塔」の展示を「歴史の書き換え」などと批判した。のちに発言は不適切であったとしたが、沖縄の歴史教育や平和教育を非難した根幹部分には、謝罪も撤回もしていない。

沖縄戦の実相をゆがめる歴史修正的な姿勢である西田氏の発言に対して、沖縄県議会は抗議決議を可決した。一方で参政党の神谷代表は、「沖縄の人たちが戦ったのは米軍で、日本軍の人たちが、日本人が、沖縄の人たちを殺したわけではない」などと発言をした。沖縄戦では、旧日本軍の兵士が住民を殺害したという証言が県内各地で残されていて、沖縄県史などにも記されている。

まずは、こうした政治家たちの傲慢な歴史修正主義を批判することは大事であろう。そのうえで、沖縄戦体験者が少なくなる現在、今後その記憶をいかに継承して、西田・神谷両氏のような発言のようなものを許さない人々の意識を繋げてゆけるかが課題となってくる。

■沖縄戦、米軍占領史を学びなおす

ここで私は、16年前の、ある著作を思い出した。屋嘉比収さんによる『沖縄戦、米軍占領史を学びなおすー記憶をいかに継承するか』（世織書房・2009年）である。屋嘉比さんは15年前に闘病の末53歳で他界された日本近現代思想史・沖縄学の研究者である。

本書において、戦後世代で沖縄戦を体験していない屋嘉比さんは、体験者との共同作業を積み上げることで「当事者性」を獲得し、自分自身の問題として沖縄戦を「学びなおす」ことを提起している。「学びなおす」とは「記憶」を「継承」するということで、自分の位置から沖縄戦を絶えず再審することにその可能性をみている。

■「逃げなさい」という「他者の声」

ここで、沖縄戦における「集団自決」（屋嘉比さんとしては「強制的集団自殺」）において、「逃げなさい」という他者の声を聴いて生き残った人々の行動に注目している。そこで非体験者である自分たちが聴く声とは、日本軍の上位下達によるタテ構造の強制の末端で、個と共同体の合一的な融合の声に亀裂を入れる「他者の声」を聴いて生き抜いた〈豊かな人〉の声と行動ではないか、としている。

そして「強制的集団自殺」は、日本軍の存在が決定的要因であることは疑いないことではあるが、自分の問題として「わたし自身が起こすかもしれない」と考えると、複合的な要因がからんでいて、その形態は一様ではないとの認識となる。その認識は様々な「証言」を継承するところから生まれるのだ。

■「現実」を変革するために、語りなおす…80年目の夏に私たちも

岡本恵徳さん（1934年宮古島生まれ・沖縄での評論活動や草の根運動に参加）は「記憶とは現在と切り結ぶ地点でしか意味を持たない」とする。屋嘉比さんは、岡本さんの言葉を引用しつつ、日本と沖縄では、沖縄戦に関して、その場所性や位置の違いによって、リアリティーの感じ方において大きな違いがあると指摘する。そして、アジア・太平洋戦争において東アジアや東南アジアでは地上戦になった地域が一般的であり、地上戦の体験のない「日本本土」こそ、東アジア地域では例外的であると指摘している。

戦争の記憶としてたんに「忘れ去られていたものを回復するという、反忘却」だけではなく、「何のために、どのようにして、どのような位置から思い出すのか」問うのが肝要なのである。屋嘉比さんは「沖縄戦の記憶は、それから繋がっている沖縄の巨大な米軍基地や新たな基地建設を許すことなく、その『現実』を改革するために、さらに東アジア地域における『記憶の未来化』のためにも語りなおさなければならない」としている。

私たちも、自分の立っている位置で粘り強く様々な「証言」から未来を切り拓きながら、日本の現実を「変革」してゆくことが求められている。

80年目の夏に（小野信也）

【読書案内】“戦後80年”の9・1を前にして読んで欲しい本

愼蒼宇著『朝鮮植民地戦争 甲午農民戦争から関東大震災まで』有志舎、2024年 3000円+税

著者の愼蒼宇さんには、昨年来、5回にわたる「関東大震災101年目の2024年開講　侵略史講座—近代日本の朝鮮植民地化を中心にin練馬」の講師をしていただいた。先日の6月27日にも、「今年は“日韓条約”60年　日本の朝鮮植民地支配と戦後を考える　写真パネル展と講演会」で、「近代日本の戦争と戦後ー朝鮮植民地支配を中心に」というテーマで講演をしてもらった。本書は、その愼さんが執筆されたものである。

「植民地戦争」という言葉は、イラク戦争が「現代版植民地戦争」と言われ、多少は人口に膾炙したたかもしれない。“戦後80年”という場合、想起される“戦争”は、英米など連合国との戦争を代表例とした国家間戦争ではなかろう。だが、近代欧米諸国は、植民地支配の過程で、それに服さぬ民衆に対して一方的で残虐な「非対称な戦争」を行ってきた。日本に即して言えば、日清戦争後に植民地として獲得した台湾での“討伐戦”などだ。

本書は「序章」で「朝鮮植民地戦争とは何か」について述べているが、具体的には、日朝・日清戦争と並行して行われた甲午農民戦争、特に第二次蜂起（駆逐日本）に対する苛烈なジェノサイド、日露戦争下の抗日運動に対する弾圧、韓国保護国化に抗した義兵戦争時の弾圧、三一独立運動弾圧、シベリア干渉戦争からの撤兵部隊を中朝国境近辺の独立軍弾圧に差し向けて起こした間島虐殺などである（第二章。なお、義兵に関しては第五章、武断政治—シベリア戦争ー三一独立運動課程については第六章が詳しい）。

そうした植民地戦争経験が蓄積され（第三、四章）、関東大震災で発揮された（第七章）ことを、本書は解き明かす。関東大震災時の軍部指導層、動員部隊の戦歴を辿る叙述は圧巻だ。

軍幹部・部隊でなく、虐殺の当事者・加担者となった自警団などにも、植民地戦争経験者は多くいたことは間違いない。彼らが植民地戦争で内面化したのは、植民地支配に抗する朝鮮民衆への「不安と恐怖」に根差した差別的な不信感、そして加害者であることに目を背けた“被害者意識”。地域の指導層となった彼らは、地域住民にもそうした意識を広め、虐殺に加担させた。そして、植民地戦争で身に着けた“殲滅戦”の手法を、震災下に発揮した。この観点からの掘り下げが、愼さんだけでなく、私たちにとっての今後の課題となろう。

なお、“殲滅”の論理がいかに「朝鮮王朝時代における民衆反乱の鎮圧と刑罰」（第一章）とは異なるものかも明らかにされている。それは、「文明化」という植民地支配正当化の論理がいかに誤っているかを刑罰論の観点からあぶり出している。

“戦後80年”を考える上では、「終章」で提示されている「近現代の朝鮮をめぐる「一五〇年戦争」の祖座」を受け止めることが重要だ。植民地戦争という観点から“戦争”をとらえず、その責任と向き合うことのなかった“戦後80年”。植民地支配の責任・補償問題を日韓条約で「解決済み」としてきた60年。それどころか、現在、加害の歴史の抹殺と差別・排外主義を扇動する勢力が台頭している。南北分断および「戦時・準戦時状態の継続を支えてきた「親日派」」の存在に代表される韓国内の分断。東アジア冷戦体制は存続し続け、日米韓軍事一体化に見られるように強化さえされている。終章のタイトル「終わらない朝鮮植民地戦争」が示す通りだ。

遡れば、明治維新と同時期から今日まで、朝鮮半島は「火薬庫」であり続けていると愼さんは指摘している。明治維新から日露戦争までを「成功物語」ととらえる歴史観が広く受容されている。だが、これも愼さんが指摘しているが、「国体・尊王論に基づく征韓思想」、自由民権派も含む「征韓論」や「朝鮮への優越心・指導者意識」その批判的検証も必要だ。“戦後80年”を契機に、「明治維新から疑え」という視点も併せて、6月27日の講演テーマである「日本の朝鮮植民地支配と戦後を考える」ことを持続させていくことが求められていると思う。

（文責:池田）

＜付記＞ 本書は、「問いつづける民衆史」(全11巻)の第一巻として刊行された。第二巻は、志賀美和子『闘う「不可触民」—周縁から読み直すインド独立運動—』(既刊、本体3400円+税)。続いて、伊藤順二『義賊伝説と革命—帝政ロシア末期のジョージアの民衆と英雄像—』、浅田進史『植民地主義の現場から—ドイツ・東アジア・世界経済—』、眞城百華『エチオピア女性兵士たちの挑戦—戦争と女性解放—』、小川原宏幸『差別をめぐる交錯—植民地朝鮮の地域社会と衡平運動—』、北村嘉恵『フロンティアを生き延びる—台湾先住民族の近現代史—』、秋山晋吾『取り締まられるよそ者たち—18世紀ハンガリーの放浪民—』、土屋和代『「民衆」のロスアンジェルス—レイシズムに抗う文化と知—』、仲松優子『絹糸と権力—18世紀フランスの女性労働と経済世界—』、藤野裕子『女同士の性愛を描く—近代日本のクィア史・民衆史—』が刊行予定。

【雑誌漁り読み】対談：上野千鶴子×与那覇潤「江藤淳、加藤典洋、そしてフェミニズム」(『文學界』2025年７月号)

『文學界』2025 年 7 月号に、上野千鶴子と与那覇潤の対談「江藤淳、加藤典洋、そしてフェミニズム」が掲載されている。与那覇の『戦後史を歩きなおす　江藤淳と加藤典洋』（2025 年 5 月 14 日）の帯に上野が「推薦」を書いた機縁だと言う。その「推薦」には、「戦後批評の正嫡を継ぐ者が登場した」とある。対談の冒頭で上野は、「正嫡とか庶子は、差別用語だから使ってはならない歴史用語」と断った上で、加藤の登場を江藤の正嫡が登場したと受け止め、加藤を継ぐのは誰かと思っていたら与那覇が登場して感動したと述べている。

与那覇は 1979 年生。対談で、江藤が自死した 99 年は大学 2 年生で、臓器移植法が成立して生命倫理にまるわる論争が盛んだった頃、他者を加害しなければ何でも自己決定でいいと唱える宮台真司を「進歩的」ととらえていて、保守の権化のような江藤が「尊厳死」を実践したように思い不思議だったと回顧している。心身を患って歴史学者を辞めたという。現在は、フリーの批評家とでも言えばいいのだろうか。歴史学界には随分憤懣があるようだが、その辺の事情は評者にはよくわからない。

『江藤淳と加藤典洋』はざっと目を通してみた。一部を除けば、諸紙誌に執筆したもののアンソロジー。専門的な完成度を求めても仕方がないと思うが、疑問点が多い。同書は、「戦後史の峰に登る」と「現在への坂を下る」の二つが大部を占める。「戦後史を上る」は、「人間宣言　太宰治『斜陽』」、「社会党政権　椎名麟三『永遠なる序章』」、「六全協　柴田翔『されど　われらが日々』」、「ふたつの安保　庄司薫『赤頭巾ちゃん気をつけて』」、「沖縄返還　村上龍『限りなく透明に近いブルー』」の５編から成る。「現在への坂を下る」が江藤論、加藤論。

「戦後史を歩きなおす」とタイトルにあり、「戦後史の峰を上る」には太宰や椎名が扱われているのに、「政治と文学論争」がまったく触れられておらず、少年期に「近代文学」に集った批評家、特に平野兼に惹かれていた評者としては、「どこが戦後史かよ」と突っ込みたくなる。平野の「一つの反措定」（1946 年４月 15 日）には、「目的のためには手段をえらばぬという点に政治の特徴がある。・・・プロレタリア的政策にあっても、ハウス・キィパーといふような「制度」（？）の採用された一時期があった。・・・今日文学に携はるものが、とにかく政治はもう御免だよと方言しがちだとしても、あながちにとがめるべきではない」という有名な一節があるのだが・・・。与那覇は「あとがき」で「わたしなりのフェミニスト批評の企てでもある」と言っているのだし・・・。

対談では、上野は「結局は女が男の敗北を引き受ける、『ケアする性』になっているじゃないですか。本書がとりあげた作者は全員男性です。男性が女性的なるものに仮託した妄想でしょ」と一蹴。『妻と私』で江藤が「妻は私のすべて（注：殴打事件やガン告知をしなかったこと）を赦した」との記述について、「ワイフ・ビーターはほとんどリピータ」と言い、「究極の死者の占有」だと非難した上で、「日本の男は、晩年になると『母』に回帰するのかって（笑）」と語る。「正嫡」というのは、そういう男流文学&批評家の「正嫡」という皮肉だったのか？

『江藤淳と加藤典洋』を精読する暇がなかったので不正確だとは思うが、ざっくり言って前提とされる「戦後」像は、「敗戦によって父性が喪失した時代」。それは「「われわれの理想（注：平和主義）を守れ」として護憲を主張するほど、本来われわれでなかったもの（注：「押しつけられた憲法」）に拘束されていく」という「ねじれ」を抱え、安全保障を米軍に依存する「よごれ」を負ってきたという加藤史観。それを前提に、「湾岸戦争に反対する文学者声明」を取りまとめた柄谷行人を批判し、東日本大震災後の脱原発運動で「60 年ぶりにデモに来た」と言った柄谷、「戦後の達成を『「守る」でなはなく、「やめる」「変える」』を掲げた今回の運動こそが・・・新時代の画期なのだと煽った」小熊英二を「歴史のつまみぐい」と批判する。一方、加藤の再生エネへの移行期においては原発を維持するべきだという主張を肯定している。柄谷や吉本隆明については、与那覇自身、深くは読み込んでいないようだ。だが、吉本の「反・反核論」から加藤へ至る「系譜？」は継承しているようだ。

上野も加藤を高く評価する。「加藤さんの言うように『選び直し』と言ったとたんに『改憲派』に入れられてしまいます。なにしろ護憲派にとっては『国民投票』すら認められない状態でしたからね。・・・私が第三、第四の道があると論じたのは、加藤さんの『敗戦後論』があったから」と言う。上野は、「『自国の防衛は自前でやれ』というトランプが出てきたことは、米軍に出ていってもらう千載一遇のチャンスかもしれません（笑）」とも語る。「（笑）」とあるように冗談ならいいのだが、「戦後史」の帰結が反安保・自主防衛改憲に陥っていく流れに掉さすことにならないことを評者は願うばかりだ。　（文責：池田）

PS 小林秀雄についても触れたかったが手に余る。福田和也にも言及したかったのだが・・・。文学に詳しい方、是非、ご投稿を！

【チェックポイント】アフリカ開発会議(TICAD)開催(8 月20日~22日 in 横浜)に思う

「戦後」なんてあったのか？「人道的危機」の「使い捨て消費」に陥っていないか？

2019 年の TICAD

アフリカ開発会議（TICAD）をご存知だろうか。1993 年以降、日本政府が主導し、国連、国連開発計画（UNDP)、世界銀行及びアフリカ連合委員会（AUC）と共同で開催されている。開催地は、隔年アフリカ、隔年日本。今年は、８月 20 日か 22 日にかけ、横浜で開催される。そもそもは、日本の国連常任理事国入りの票田としてアフリカ諸国をオルグする思惑ではじめられた。もちろん、ODA を呼び水に資源開発などで日本企業が進出するという意図も併せ持つ。近年は、中国のアフリカへの影響力の拡大に対抗するという意味合いが濃くなっている。中国の援助について盛んに「債務の罠」に嵌めるものという批判がなされているが、紐付き援助は、元々日本のお家芸だった。2014 年に当時の安倍首相が５年で 700 億円の ODA を供与して進めたモザンビークにおける「ナカラ回廊開発」が、現地住民から「アフリカ大陸とアフリカ民衆に対する企業支配、植民地主義的征服だ」（農村コミュニティ開発のためのアカデミック・アクション＝ＡＤＥＣＲＵ）と厳しく批判されたことを覚えている方もいるのではないだろうか。特に、「機械や化学肥料、企業との契約栽培を導入して大規模化し、大豆や穀物の一大生産地にする構想」は、家族経営による小規模農業が中心の同地域における土地収奪につながるとの批判を浴びた（「赤旗」2017 年 1 月 24 日)。

TICAD に向けて、田中明彦が毎日新聞の 7 月 10 日に、「高まるアフリカへの期待　経済成長と民主化」という論考を寄せている。バラ色の未来を描き出すようなタイトルだが、田中は以下のように紛争を列挙している。

「エチオピアのティグレ紛争は、22 年 11 月に和平が実現したものの、同国ではその後も不安定な地域が残っている。23 年４月にはスーダンで内戦が勃発し、継続している。ギニア、ブルキナファソ、マリ、ニジェールではクーデターが起き、今も民政移管に至っていない。／コンゴ民主共和国（旧ザイール）ではルワンダを巻き込んだ武力紛争が継続していたが、今年６月 27 日に和平合意が署名された。11 年に独立した南スーダンでは、その後国内勢力間の武力対立を経て和平の方向で合意したが、なかなか選挙の実施ができず現在も不安定な状況が続いている。イスラム過激派のテロ活動もソマリアやナイジェリア北部、マリ、ブルキナファソなどで継続している」

これもアフリカにおける紛争の全部を網羅していない。しかも挙げられている紛争地のどこも、以前も紛争が起きていた地域だ。コンゴ民主共和国といえば、独立直後のコンゴ動乱、モブツ独裁、その後 20 年に及ぶ内戦が思い起こされる。南スーダンの独立は、それを認めないスーダン政府との 1955 年～72 年、1983 年～2005 年と、二度にわたる長期の「内戦」を経て実現した。一時停止しただけで「戦争状態」の方が長い。アフリカの紛争を振り返ると、「“戦後”なんてあるのか！」と叫びたくなる。“戦後 80 年”に際して、「悲惨な戦争」に対比する形で「平和な“戦後”」への“賞賛”が陰に陽に喧伝されているが、その歴史像はあまりに薄っぺらではないか。

遡れば、アフリカはずっと植民地戦争に晒されてきた。現状を思う時、植民地戦争に終わりはない。形を変えて現在も続いている。アフリカを開発対象、大国同士の勢力争いの場とみなしてきた“戦後”も、そして“現在”も、そのことに気づかない。スーダンと言えば、一時期、ダルフール紛争が耳目を集めた。今は・・・。

国連難民高等官事務所でもなければコミンテルンでもない個人としては、恒常的に世界各地のことに関わることはできない。だが、「“人道的危機”の使い捨て消費」に陥らないように努めることはできる。

誰だったか、フランスの思想家だったと思うが、“人道的危機”はメディアによって取捨選択され、読者・視聴者にウケするよう編集され、消費される」と批判していた人がいた。消費者の選好に合わずスベるケースもあると言う。「パレスチナはウケるが、アフリカはウケない」といった具合だ。

トランプ米大統領が、アフリカ諸国の首脳に、「援助の話でなく貿易の話をしよう」などと、「援助」の装いすら纏わない露骨な利益要求を突きつけている。そんな今だからこそ、これまでに増して日本の国連常任理事国入り願望の思惑に発し、日本政府・資本の対中対抗・利権漁りのために開催される TICAD を批判的に注視する必要がある。

（文責:池田）

【資料】〔声明〕米軍によるイラン攻撃糾弾！　やめろ！イラン戦争　日本政府は加担するな！

注:トランプ来日・石破＆天皇会談に反対する実行委員会の呼びかけで７月11日に行われた「ガザ虐殺戦争、イラン戦争･･･イスラエルをトランプは野放しにするな！　アメリカのイラン攻撃糾弾！　やめろ！イラン戦争　日本政府の戦争加担を許さないぞ！7･11行動」で発しられた〔声明〕

イスラエルは、6月13日、「核開発阻止」を口実にイランへの攻撃を開始した。ガザ虐殺戦争はじめイスラエルの軍事行動を野放しにしてきたトランプ政権は。イラン攻撃を容認するだけでなく、イランに「無条件降伏」を迫り、それが受け入れらないと、自ら６月22日に攻撃に加わった。

イランはIAEAの査察を受け入れており、核開発の証拠もなく、ましてやイスラエルやアメリカがイランによって核による攻撃を受ける事態が差し迫っているわけでもなかった。にもかかわらず、イスラエルやアメリカは攻撃を行った。この攻撃は、「自衛」どころか「先制攻撃」とすら言えない予防戦争である。また核施設への攻撃は、核攻撃同様の核被害をもたらす実質的な核攻撃である。「核施設」のみを破壊したかのような情報操作を行っているが、イラン政府によると、攻撃による死者は、7月7日時点で1000名を超えるという。イラン攻撃は、民間人に対する大量殺りく攻撃である。これらの点で、今回の攻撃は、国際戦争法・国際人道法に反している。

トランプ政権は、あたかも第三者の如く「停戦」を要求し、６月25日にイスラエル・イランは「停戦」した。しかし、何時、戦争が再燃するか分からない。現に、７月７日にも、イスラエルは、イランとの関係が深いイエメンのフーシ派に対する攻撃を行った。イスラエルの最終目的はイランの体制崩壊だとも言われている。トランプ政権もイランが核開発を放棄するまで、「核開発」を口実とした攻撃という選択肢を手放しはしない。一方、NPT条約に加盟することなく実質的に核保有しているイスラエルは不問に付している。そもそもアメリカは世界最大の核保有国だ。自らの核を不問にして核開発の非をならしても説得力はない。しかも、第一次トランプ政権はイランとの核合意を破棄した。2020年には、当時のイラン革命防衛隊司令官・ソレイマリをイラクで無人機による空爆で殺害している。第二次トランプ政権も、経済制裁を強めてきた。圧力をかけられればかけられるほど、イランの現体制指導部を核開発に追い込むだけだ。結果、戦争の連鎖を招く。力で平和は創れない！

先進諸国の加担も許すわけにはいかない。ドイツのメルツ首相は「イスラエルが汚れ仕事をしてくれた」と語った。石破首相を含むＧ７サミットに集まった首脳たちは、６月16日に、イスラエルの自衛権を擁護し、イランを不安定要因だと決めつける共同声明を発表した。英仏独はアメリカのイラン攻撃も支持した。石破首相も「決意を示した」と理解を示す見解を述べた。「邦人救出」を口実に、ジプチの自衛隊基地に航空機部隊を派兵した。事態の推移によっては、ソマリア沖、オマーン湾に派兵している海上自衛隊部隊も動かすおそれがあった。日本政府は、このような加担をやめるべきである。

以上から、私たちは以下をアメリカ政府と日本政府に要求する。

一、アメリカはイラン敵視政策をやめ、二度とイランを攻撃するな。
一、日米は、対イランだけでなく、ガザ、西岸、レバノン、シリア、イエメン・・・すべてのイスラエルの軍事的暴走を容認するな。
一、日本政府は、イスラエルとアメリカの中東での戦争への加担をやめ、ジプチ、ソマリア沖、オマーン湾から自衛隊を撤退しろ。

2025年7月11日

トランプ来日・石破＆天皇会談に反対する実行委員会

追記　7月14日、イスラエルは、ダマスカスにあるシリア暫定政権の軍司令部などを攻撃した。「ドゥルーズ派保護」を口実にしている。暫定政府(EUなどは「民主主義者」と持ち上げているが、暫定政府を主導しているのは旧ヌスラ戦線のジハード主義者。イラン革命防衛隊はISだけでなく、ヌスラ戦線とも戦っていた)がドゥルーズ派などマイノリティ「抹殺」を意図すると言っても過言ではない抑圧を行っていることも事実。とはいえ、イスラエルの目的は「保護」ではない。「緩衝地帯」形成が目的と報じられている。深読みすれば、暫定政府の後ろ盾になっているトルコへのけん制？　アブラハム合意(アラブ諸国のイスラエルとの二国家間承認。サウジとの合意寸前でガザ虐殺戦争で飛ぶ)をぶっ飛ばすのかと、アメリカとも齟齬があるとも･･･。サウジアラビアもヌスラ戦線を好ましくは思っていない。だが、パレスチナの国家承認が必要との立場。フランスがパレスチナ国家承認に舵を切った。イギリスもガザ停戦合意がなければ承認すると言い出した。日本は？　落しどころは何処？

【科学哲学への招待②】

カール･R･ポパー 著『開かれた社会とその敵 第一部 プラトンの呪文』

（内田詔夫・小河原誠 訳、1980 年、未來社／小河原誠 訳、2023年、岩波文庫）
※本稿は、未來社版に基づき執筆しました。

第一部 プラトンの呪文
起源と運命の神話
第一章　歴史信仰と運命の神話
第二章　ヘラクレイトス
第三章　プラトンの形相ないしイデアの説
プラトンの記述的社会学
第四章　変化と静止
第五章　自然と規約
プラトンの政治綱領
第六章　全体主義での正義
第七章　指導者の原則
第八章　哲学者王
第九章　唯美主義、完全主義、ユートピア主義
プラトンの攻撃の背景
第一〇章　開かれた社会とその敵

プラトンについて、どのようなイメージをお持ちでしょうか。古代ギリシア哲学の人、ソクラテスの弟子、「正しさ」や「勇気」といった徳について対話篇を書いた人…など、色々あるかと思いますが、今回は「『プラトンの正義論』と『現代の全体主義』との理論と実践の同一性」を論じた『開かれた社会とその敵　第一部　プラトンの呪文』をご紹介します。

著者のカール・R・ポパー（1902 年 7 月 28 日－1994 年 9 月 17 日）はユダヤ系オーストリア人で、1937 年に『科学的発見の論理』“Logik der Forschung”を発表し、科学的仮説の必要条件として反証可能性を提起した科学哲学者である一方、第二次世界大戦前から戦中にかけて全体主義とマルクス主義を批判する『開かれた社会とその敵』を構想し、その原書“The Open Society And Its Enemies”を 1945 年に出版した社会哲学者です。今回、ご紹介する『第一部　プラトンの呪文』は全体主義批判が中心、『第二部　予言の大潮　－　ヘーゲル、マルクスとその余波』はマルクス主義批判が中心という構成になっています。

（ちなみに、著名な投資家ジョージ・ソロスもポパーの弟子で、ソロスの設立した慈善団体の「オープン・ソサエティ財団（Open Society Foundations）」という名前はポパーのこの著書が由来と言われています。）

ポパーのいう「開かれた社会」と「その敵」は、以下の対比に端的に表されています。

「開かれた社会を支持して（紀元前四三〇年頃）－政策を立案するのは少数の者のみであるが、それを判断することはわれわれすべてができるのである。　アテネのペリクレス」

「開かれた社会に反対して（約八〇年後）－すべての原則のうちでも最大のものは、男であれ女であれ、誰でも指導者なしでいてはならないということである。（中略）戦時にあっても平和のさなかにあっても－その目を指導者に向け、忠実に彼に従うべきである。（中略）一言で言えば、長い間の習慣によって、勝手に行動することなど夢にも思わず、またそんなことが全くできなくなるように自分の魂を訓練すべきである。　アテネのプラトン」

ポパーはプラトンを「最初の社会学者」と捉え、「自分のプラトン論をプラトンの歴史信仰と『最善国家』に限定している」として、「プラトンの政治綱領」を批判的に分析していくわけですが、「プラトンの政治綱領」については、以下のようにして「全体主義綱領」として捉えていきます。

まず、ポパーは「第一には変化と静止についての彼の観念論的な理論に対応する定式」（すべての政治変化を阻止せよ！）と「第二には自然主義に対応する定式」（自然に帰れ！）がプラトンの基本的要求であるとします。

そして、その基本的要求から引き出せる「プラトンの政治綱領」の主要な要素として、

(A)階級間の厳格な区分。すなわち、牧者と番犬から成る支配階級は人間家畜から厳格に区分されなければならない。

(B)国家の運命と支配階級のそれとの同一視。専らこの階級とその統一にのみ関心を集中すること。またこの統一に役立てるために、この階級の育種と教育のための厳格な規則、およびその成員の関心の厳重な監視と集団化。

を提示し、これらの主要な要素から
(C)支配階級は軍事力や軍事訓練といったものを独占し、武器を携行したり各種の教育を受ける権利を独占する。だが、経済活動、とりわけ金儲けに関与することは許されない。
(D)支配階級のすべての知的活動の検閲、および彼らの心を型にはめ込み統一することを目指す継続的な宣伝がなされなければならない。教育、立法、宗教での革新はすべて、防止され抑圧されなければならない。
(E)国家は自己充足的でなければならない。国家は経済的自立を目指さなければならない。さもないと、支配者たちは商人に依存するか、または彼ら自身が商人になってしまうだろうからである。第一の場合には彼らの力を傷つけ、第二の場合には彼らの統一と国家の安定を傷つけるであろう。
という他の要素を導出した上で、「プラトンの政治綱領」はまさしく「全体主義綱領」として記述できるとポパーはしています。

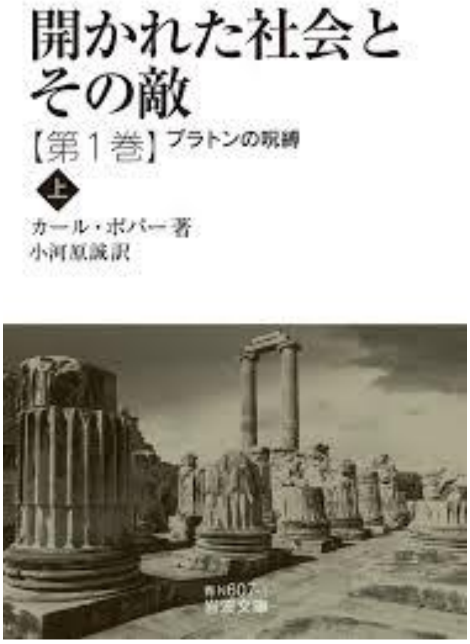
そこから、この「プラトンの政治綱領」の中で「正義」「真理」「知恵」「善」「美」「幸福」といったイデアが果たす役割とは…と問題分析は展開されていきます。

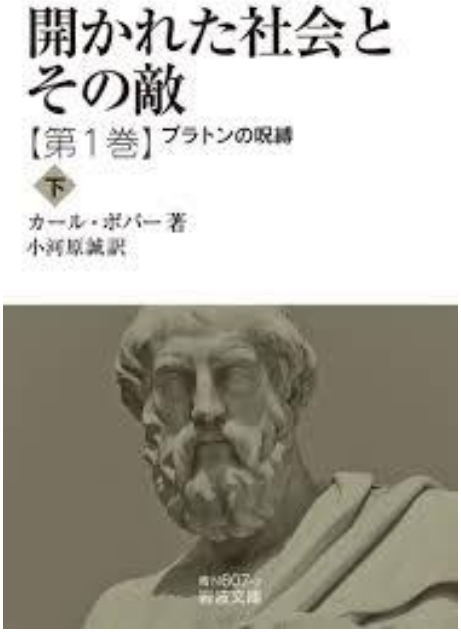
私にとっては、学部２年のときに古代哲学史の授業で出された「プラトン関係の本を何か１冊読んで、2000 字のレポートを書くこと」という課題のために、「プラトン、あんまり興味ないんだけど…」とか言いながら手に取った本でしたが、こんなポパーの角度からのプラトンの捉え方が斬新で面白かった思い出の本です。また、それまで科学哲学者としてのポパーの一面しか知らずにいた無知な私にとって、社会哲学者としてのポパーを知るきっかけとなったのも、この本でした。

哲学にご興味のない方々にも、ご一読をおススメしたい古典的名著です。

最後に…「プラトン関係の本を何か１冊読んで、2000 字のレポートを書くこと」という課題を出して、私がこの本を読むきっかけを作ってくださっただけでなく、その課題に対してこの本を選び、恐らくとんでもなく生意気なレポートを提出したのに（当時のレポートが見当たらず、反省材料が手元にないのが残念ですが）A 評価の成績を付けてくださった、寛大なプラトン研究者、納富信留先生に感謝申し上げます。

（文責：佐藤えり）





【文化欄：反戦歌謡考②】

THE CHECKERS（チェッカーズ）『100V のペンギン』（1990 年）論

今回は私が大好きなチェッカーズです。『100V のペンギン』（作詞：藤井郁弥　作曲：藤井尚之）は 1990 年 8 月 8 日にリリースされた『OOPS！』という、シングル曲が 1 つも収録されていない、商業目的度外視とも言えるアルバムの中に入っている一曲です。そのため、かなりチェッカーズ好きの方でないとご存知ない曲かもしれませんが、チェッカーズ解散後、フミヤがソロになってからもライブで時々歌っている曲です。

以下、ボルドー字体が『100V のペンギン』の詞の抜粋です。

悪夢にうなされベッドを転げ落ち　太陽も転げ落ちた
蛇口を捻りトランキライザー二錠　座りこみ咬み砕いた

これが 1990 年当時 28 歳のフミヤ世代の日常なの？と思わせる詞の始まりです。

邪魔なアルミ玉チャリティーボックスに捨て　舌を出し釣りを数える

それはそれは、バブルの良き時代で結構なことですね、というところから、突然…

街は黒く濁った雨にうたれ　透き間なく響く泣き声

…いつ、どこの時代に変わったの？という展開です。

100V のペンギンたちは不思議な電気仕掛けの夢を見る
壊れた TV が「桜は散った」と告げる
明日はまたひとつ昔話しが消える
あの日流した涙は嘘さ
子供たちはただ聞き慣れた　メロディー口ずさむ
The Stars and Stripes Forever

1990 年と 1945 年、時代が錯綜していき、「星条旗よ　永遠に（The Stars and Stripes Forever）」…。45 年間いつの時代も子供たちは無自覚のうちに星条旗（The Stars and Stripes）に支配され続けているということ？

いや、45 年間ではなく、1945 年から 80 年が経った 2025 年現在でも、教育関係の仕事をしていると、“Japan as Number.2（アメリカに次ぐ日本）”と認識している子供たちが多いことに驚かされ続けていますが。

花は枯れ Shinboku さえも倒した　爆弾が落ちた日から
失脚の古傷も記憶もなく　この島に生まれてきた
100V のペンギンたちは不思議な電気仕掛けの夢を見る
砂時計がサラサラ時を落とす
膝を抱えて言葉も心も埋もる
あの日叫んだ怒りは嘘さ
なす術もなく再び艦隊は沈みゆく
The Red and White Forever

やはり、2025年現在になっても古くならない詞ですね。戦争によって流した涙だけでなく、叫んだ怒りまでもが嘘だったと言い、「日の丸よ　永遠に（The Red and White Forever）」…。防衛費増額という名の下で、なす術もなく再び沈みゆくためだけの「日の丸（The Red and White）」軍備拡張は続きます。

君の方が辛いね　君が僕を作った
過去の消えたこの街　受け継ぐ日が近づく

『100Vのペンギン』を聴きながら、2025年の今、「権力によって操作され与えられた夢、不思議な電気仕掛けの夢を見ているだけではないのか？」、「過去の消えたこの街をどう受け継いでいるのか？」など問い直してみるのはいかがでしょうか。

（文責:佐藤えり）

【爺のコメント】

流石、元国労のフミヤ！

1983年にデビューしてヒット曲連発時代に、ラジオ番組で、佐世保での反基地闘争に行って、機動隊に「国労のチビ」と言われて頭を押さえつけられたといったエピソードを語って、「俺の世代でデモ行って機動隊とやり合うなんてことした奴いねぇよな（笑）」と言っていたと、当時、後輩から聞いた記憶がある。

1962年生のフミヤは、1960年生のコメント執筆者とほぼ同世代。同世代で機動隊とぶつかる経験をした者は、極希少。そう言えば、国鉄分割民営化の頃、先の話を教えてくれた後輩が「チェカーズは何時、国鉄分割民営化反対闘争に立ち上がるのか！？」と、飲み屋でクダ巻いていた。この曲が出されたのは1990年だから、ほぼその頃だとも言えなくない。でも、ちっともこの曲に関心を払うことはなかった。

同世代という感覚はあった。「仲間がバイクで死んだのさ」と唄う『ギザギザハートの子守唄』がヒットして聞く気がなくとも耳に入ってきた頃、“暴走族世代”という括りでいえば、一応「進学校」と言われている高校に通っていた僕ですら「一回、乗せてやるよ」という友だちの誘いにのってバイクの後部座席に乗せてもらって“疾走”した70年代後半・・・。

ところで、歌詞を読み返すと別の解釈も浮かんでくる。**「なす術もなく再び艦隊は沈みゆく」**って、1990年というバブル絶頂期に、バブル崩壊、そして97年アジア通貨危機による**「経済大国・日本」の「第二の敗戦」の予兆を嗅ぎとっていた**とも・・・。**敗戦（「花は枯れShinbokuさえも倒した　爆弾が落ちた日」）で、反安保（「失脚の古傷も記憶もなく　この島に生まれてきた　100Vのペンギンたち」の「不思議な電気仕掛けの夢」）で、叫んだ怒りも流した涙も嘘っぱちで、星条旗と「日の丸」が「永遠」である状況を批評していると解せば、**「雑誌漁り読み」の欄で触れた**加藤典洋の「敗戦後論」に似ているのかも・・・**。

（文責:池田）

【編集後記】

PDF 版をメール送信する形態にして第 4 号となった、書き手に加わってくださる方も増えてきた。

だが、「自衛隊動向日誌」とか構想していてできていない企画もある。今号は「特集」的な構成にできないかと思い、“戦後 80 年”を意識したものにしたが、今後、特集的な組み立てを継続できるか不確定だ。

月例学習会も軌道に乗りつつあるが、次は編集体制を整えていきたいと思っている。今のところ、毎月第一火曜日を考えている。第 6 号の編集会議は以下。関心のある方は、是非、ご参加ください。

〔編集会議ご案内〕

第6号(10 月1日発行)の編集会議

下記の日程・場所で開催しますので、関心のある方は090－5208－5803(池田)に連絡ください。

9月2日(火)19:00　藍苑(練馬駅北口徒歩10分)